

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

タイトル：「契丹語・契丹文字研究の新展開」（平成22年度第1回研究会）

日時：平成22年4月24日（土曜日）午後1時半より6時

場所：AA研306号室

報告者名（所属）：

松川節（主査・AA研共同研究員・大谷大学）「このプロジェクトが目指すもの」

今年度から3年計画で実施される、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究プロジェクト「契丹語・契丹文字研究の新展開」について、その概要、学術的背景と研究の経緯、研究目的と各共同研究員のタスクフォース、最後に研究意義と期待される研究成果を述べた。

武内康則（AA研共同研究員・京都大学）「インディアナ大学滞在報告」

発表者は2010年1月15日から4月14日まで米国インディアナ大学中央ユーラシア学部 (Department of Central Eurasian Studies)において研究活動を行った。本報告では、現地での留学生活および研究について報告した。この滞在は、日本学術振興会研究者海外派遣基金による「優秀若手研究者海外派遣事業」による留学であり、世界的に著名なモンゴル学者 György Kara 教授の指導のもと、未解読の言語である契丹語の音韻体系に対する研究を行うのが目的であった。契丹文字で表記された中国語音は契丹語の音韻体系に適応したものであり、文字表記からその背後にある契丹語の音韻に対する分析を行った。本発表では、Kara 教授との進めた研究について報告したほか、インディアナ大学の関連する研究機関や研究者について紹介した。インディアナ大学中央ユーラシア学部は Kara 教授に加え、広くユーラシアの言語・文化・歴史の研究を行っている Christopher Beckwith 教授やハムニガン・モンゴル語の言語調査や契丹語・鮮卑語に対する研究を行っている大学院生の Andrew Shimunek 氏など契丹語に関心を持つ研究者が複数所属しており、彼らとの意見交換は非常に有意義なものであった。また、インディアナ大学はアルタイ諸語の研究で有名であり、学内に Mongolia Society や Denis Sinor Research Institute などの研究組織が存在する。それらで利用可能な文献資料はユーラシアの歴史・言語に関心を持つ研究者には非常に魅力的なものである。

上記の説明・報告に引き続き、全共同研究員が各人の専門・プロフィール・このプロジェクトへの関わり、を述べた。

AA研ですでに作成されたWebサイトの確認に引き続き、プロジェクト専用のCMS（=コンテンツ・マネジメント・システム）について松川主査から紹介と説明があった。今後積極

的に活用してグループワークを進めていく予定である。

最後に通期間・年間スケジュールを討議した。今年度の課題として契丹小字（原字）の字形確定などから作業を進めていくこと、次回研究会（7月予定）で、契丹大字・小字（原字）の構成と配列に関する基礎的な知識を共有する場を設けることなどを取り決めた。